

『どうも、是は美事だ。如何にもい、』

先生も大喜びだった。すぐ次の間へ声をかけると、丁度そこに居合した大先生も珍らしく襖から半身巨軀を見せて、にこやかにその花に見入りながら、神楽殿と書いてあった白い方の鉢の札を読みつ、二言三言話された。そして満足さうにまた偉容を襖の向ふに隠された。

十三

寒燈会は一回の休みもなく、席上持廻りで無駄なく作句した。樹人君は、その頃高樹町から下渋谷六百十九番地といふ処へ移つてゐたが、其処までは、青山車庫前で電車を下りてから暗い路を大分歩かなければならなかつたので、みんな閉口してゐた。初めて先生を案内した晩も、先生は郊外の暗い心細さに弱つてしまつて、途中で一軒酒屋を見つけるとビールを一、二本抱へて息づいたやうに吻とされた事があつた。一月の寒い夜、苔雨君が先生と左衛門先生の案内になつた事もあつたが、その折も暗い長路に元氣な左衛門先生が閉口して「小便一里糞三里つていふが、六百十九番地はまだかい」と立小便をしながらこぼされたさうだ。そしてその席上で会の名を何としようといふ問題が出ると「いっそ遠遊会としたら」など、言はれた処を思ふと、余程遠路がこたへたらしかつた。その樹人君の家には国許から来てゐるばあやがゐる、何分秋田弁まるだしなので、私達が玄関に立つても「二階に居りますからお上り下さい。」といふだけの言葉が、どんなにしても私達に解りかねて随分面喰つたものだった。

初夏の頃だった。秋田から森女さんが来てゐて、同じ二階でみんなと一緒に逢つて句を作つたことがあつたが、其の時、森女さんが樹人君に似てゐないと思つたが、其の後、森女さんの顔はすっかり忘れてしまつた。すると、この間樹人君の姪にあたる草千氏愛娘を雑誌の口絵で初めて見て、ふと見たやうな顔だと思つたが、今それを書きながら、それが森女さんの面影だつたと思ひあつた。

同じ頃の或る夜、苔雨君の処で会の折、遅れて來た樹人君が、むき出しの苺の函とミルクを持って二階へ上らうとして、其処にゐた苔雨君の兄さんの家族に面喰つたものが、洋服姿で苺の函を抱へたま、梯子段の下をぐるりと一廻りやつて大笑ひの種を播いた事があつたが、由來樹人君は腹痛を持病のやうにやるだけに、苺に限らずうまいものを食ひたい意識は人一倍強かつた。

ホトトギスの例会のくづれ、私を神楽坂に引張つて行つて、米国歸りを開店したての山本へつれこんで、当時まだ東京にも珍らしかつたアイスクリームパンシユを御馳走してくれた事があつた。そして更にアイスクリームソーダを二杯のんで別に別れると、麦桿帽を阿弥陀に冠つて単衣の肩で風をきりつ、神楽坂の人浪の中に消え去る姿を、私は驚嘆して見送つた。

十四

この時分樹人君は芝の三光小学校に居つたので、樹人君の宿直日は、其処がまた寒燈会とは別に私達の句座になつた。夜になると出掛けて行つて、暑い頃は職員室を開放つて、寒い時分